

Title	柿本奨教授を送る
Author(s)	田中, 裕
Citation	語文. 1979, 35, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68647
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

柿本奨教授を送る

田 中 裕

今度柿本教授が停年退官されることとなり、月並な言葉ではあるが、烏兔匆々の感を深くする。この長い年月尽瘁された職務に一区切りをつける番が教授の上にもめぐつてきたことは、平生健康で若々しい御風貌、挙止になれてゐる私どもにはちよつと信じにくいことであるが、しかしいま立派に区切りをおつけになつたことを、何はおきお喜び申しあげなければならぬ。改めて御年譜を繰ると大阪教育大学から本学に來任されたのは昭和四六年の四月であるから、ちようど八年の歳月が私どもの上を過ぎたことになる。これはより以上に信じられないことであるが、同僚といふことの有難さでうかうかと過ごさせていただいた、その報いを感じる。

報いといへば、いつも正身の教授が傍に在り、これほど確実なことはないといふ安心から、秀抜な御業績の数々を、ひとたびはその人を離れて学びとるといふ当然の努力を欠いたために、何ほど教授の学問を理解してゐるかと問はれると、返す言葉のないことである。しかし卒業・修士論文の審査や学生の研究発表会の席上などで、綿密に下読みされ、また聴取された挙句の意見を、懇切かつ的確な言葉で、そしてしばしば仮借のない舌鋒で述べられるのに接しては、いつしか教授の学問の片鱗、いや大概を窺知しえたと思ふに至つたことも事実である。これが私に安心の上にあぐらをかせた理由

であつたといへば、盗人何とかの謗りを受けるであらうか。

先頃神戸大学の根来教授が、その影印された藤井高尚の「消息文例」の解説の中で、嘗て柿本教授が高尚について書かれた文章を引用されてゐるのを拝見して感銘を覚えたものである。それは「作品を読む事をすべてとする作品への高尚の傾倒ぶり」を讃へられ、「その余念の無い心が読み込んだ注釈となつて現われ、その間にみなぎる気魄は説の当否を越えてこちらに伝わつて来る」といふのであつたが、私はかう語られてゐる高尚の学問の風を景慕するとともに、教授がほとんど自分を語つてゐられるのではないかと感じたことである。もとよりそれは錯覚であるが、しかし私がかつても教授の学問の風について印象を尋ねられることがあるとすれば、答へたいと思ふまさにその答がここにあるといふ思ひに浸つた。その風はやく御資質に発するものであらうが、そればかりでなく長い研究生生活の中で選択し、見出し、かつ体得されたものであつたことも推測できる。それは身に付いてほとんど御性となつてゐたのではなからうか。かう申しても研究室を共にする機会はなかつたので、限られた教師生活の範囲でさへ存じあげることが多くない。しかし何時どのやうな用事でお目にかかつてても眼前に在るのはかういふ風格の教授であつて、常に真摯無難な方であつた。

御退官によつて、とりわけ専門とされた中古の分野は空白となり、しばらく私どもは途方に暮れるであらう。しかし教授はおそらく不得意であつたと思はれる雑務から解放され、いよいよ暢びやかな足どりでわが道を行かれるであらう。本当にお喜び申しあげたいのはこのことで、そのためにも南山の寿を願はずにはゐられない。

この号は餞別の意をこめて編まれたもので、まことにささやかながら御笑覧に供したい。執筆は本学で親しく御指導を受けた者、それも文学関係に限つたが、期日を守る必要から収めえなかつた寄稿もあり、心残りはある。